

ステンレス鋼線メーカートップの日本精線（本社・大阪市中央区、社長・利光一浩氏）は、事業環境の変化が激しい中、極細線などの新規需要開拓や水素回収技術の実用化など事業領域の拡大を図り、安定的な経営基盤確立に注力している。利光社長に前期業績の振り返りと今期の見通し、今後の事業展開などについて聞いた。

（橋川 渉）

――26年3月期の業績は、売上高は前期比でほぼ横ばい、経常利益は減少した。

「期初計画比では増収増益を達成した。ステンレス鋼線の販売数量は微増し、コスト高を転嫁するための値上げにより売上高は前々期並みを維持できた。

日本精線

今期見通しと事業展開

利光 一浩社長に聞く



――今期は3カ年計画産体制を確立できて画の最終年度。通期見通しでは売上高は

ほぼ目標（500億円）通りとなり、経常利益は39億円と目標（52億円）未達となりそうだが。

「経常利益が未達となりそうなのは先述した中国の太陽光パネル関連の需要が急速に冷

た。極細線などの新たな需要分野とは。」「すでに着手しているが注射器に使われる中国の太陽光パネル高強度ばね用材やカタ

源にしたいという企業は増えているが、水素は気体や液体の状態で圧縮や冷却のための機器が必要で設備が大型化しやすい。MCHはその次の好況期に備え常温で液体であり、水素に比べると扱いやすく保管も容易であるため運用が簡便な小規模工場や離島に向いている。また水素の純度を高める分離膜は単体でも販売しており実績が積み上がっている。水素回収技術はCN社会実現に貢献する事業なので実用化に向けて力を入れている」と。

極細線、医療向け中心に用途拡大

水素回収技術の実用化推進

上向いている。

精密ガスフィルタが動き出し、樹脂・繊維向けのナスロンフィルタも海外の大型案件が受注できた」

――今期第1四半期計画通りに進んでいる業績は増収増益とる

「半導体製造装置関連が引き続き好調で業績が上向いている。ここの素材が使われているケースもあるが、ンレス鋼線は当社が得意とする極細線や極細のばね用材などの細い領りで水素をエネルギー

「枚方工場第4工場」の2階部分を約3千平方メートル拡張した。熱処理後、化合繊維や高機能フィルム向けのフィルムが伸びそうだが、研修内容に改めて

※本記事は(株)鉄鋼新聞社の承諾を得て掲載しており、著作権は(株)鉄鋼新聞社に帰属します。

